

天地

ネットワーク テーブル 441号

発行：2017・1・31：天地シニアネットワーク

TENTI・TODAY <新三木会講演会><トランプ旋風>			1
会員の広場 <安城主・井伊直虎の NHK 大河ドラマ><時代劇激人コラム・第291回・ネット経済が減速中国を下支え？通販やスマホ決済、タクシー配車サービスが活況><第78回・新三木会（平成29年1月19日）講演会・「天皇の世紀を生きる」参考資料			2
連載作品			9
隨 想	天のわざ、地のほまれ—地球を測れ、宇宙をはかれ— 18. ニュートン—運動の第3法則	伊那 閑歩	9
旅行記	そうだ京へ行こう・吉刹の花物語（16） <大原の里5・寂光院>	大竹 漢洲	13
隨 想	般若心経読本（2）	藤田 克明	16
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		20
事務局			21

TENTI TODAY

新三木会・講演会のご案内と予定を掲載していますが、1月19日の第78回「天皇の世紀に生きる」という保阪正康氏の講演に、出席希望の方が数名おられましたので、久しぶりに出ました。ほぼ満席の大盛況でしたが、事前にメールで送られてき当日の資料に主催者の並々ならぬ意気込みと努力を感じましたので、ご紹介させていただくことにしました。一部になりますが、次の「会員の広場」にのせましたので、ご覧ください。皆さん、定年退職した人たちばかり、最近は講師の方々の水準が高くなりまたタイムリーな企画が多いので注目度が高くなっているようです。出席ご希望は、天地経由でも、直接でも（その際は、天地シニアと名乗っておくとスムーズです）構いません。ぜひご参加してみてください。

世界中がトランプ旋風に見舞われ混乱、動搖が続いている。これが一過性のものなのかどうか、まだはっきりしませんが、半年や1年で収まるとは思えません。明治維新のあと、一貫して欧米に追随してきた日本にとっては、大変困った状況です。欧米一辺倒からアジアへの転換が必須ですが、アジア諸国との対等な国交関係は戦前まで無いに等しかったわけですから、一朝一夕にはいきそうもありません。尖閣諸島、竹島、旧慰安婦などの諸問題を、日本の論理だけで解決するのは無理、国民全体としてアジア諸国、特に中国、韓国との関係を改めて冷静に考え、行動する必要がありそうです。

会員の広場

安城主・井伊直虎の NHK 大河ドラマの放映が始まって 2 週間が経ちました。ご当地の浜松市は絶好の観光客誘致の機会と、テンヤワニヤ。私が住んでいる浜名湖北端にある老人ホームも何となくその渦中にあるような気がして、私も観光ガイドを志願して観光客誘致に貢献しようと頑張っているつもりです。

最初のガイドの指定日は 1 月 19 日の木曜日。私の担当はこのドラマのスタートになった山合いにある「龍潭（りょうたん）寺」という臨済宗のお寺。小堀遠州作という庭園があって、ちょっとした隠れた観光名所になっていました。しかし本当に観光客が来るのかな、と心配していたら案の定、観光バスに乗った観光客の予定はナシとのことでガイドは中止。急遽、浜名湖北岸に接した地の利のよい地にこれまた急遽作られた「井伊直虎ドラマ館」・なるものの周辺にある「姫街道の関所」のガイドとなりました。

この地は東名高速道路の浜名湖サービスエリアに近いので、ちょっと立ち寄ってみようかなというお客さんがいたのか結構な賑わいでした。ただ、井伊直虎などとは関係のない「姫街道の関所」の遺跡など観光客にとっては関心もなく予備知識もないで、駐車場とドラマ館を結ぶ中間にあるだけの関所の遺跡など素通りするばかり。

この復元された関所の遺跡は過去に竹下總理大臣から各市町村がもらった 1 億円で作られたもので、井伊直虎などとは関係なく江戸時代の東海道の脇街道であった「姫街道の関所」跡の復元だったというだけ。ちなみに、姫街道の「姫」というのを安城主・直虎と混同している観光客もあって、説明には一苦労でした。

江戸時代の東海道の新井（あらい）の関所は「出女（でおんな）」の詮議が厳しいので、女の旅人は詮議の緩やかな浜名湖北岸を迂回したというもの。西国の薩摩や長州などの有力大名は江戸城に人質になっている女房・娘を先に逃してから反乱を起こすのではないかと、西へ向かう女の旅人を厳しく詮議したというでした。

男装して関所を通ろうたってそうはさせじと、立小便をさせたりと詮議は細まやかだったといいます。

それでも当日は、東は神奈川県からそして西は大阪・神戸などからの観光バスが途中下車して、観光客は「ドラマ館」へひたすら直行していましたよ。

喜多川貞夫

<時代刺激人コラム> 第 291 回

2017年1月27日

ネット経済が減速中国を下支え？通販やスマホ決済、タクシー配車サービスが活況

経済は何が弾みでアクティブに動き出すのか、読めないことが多い。ところが、国有企業改革の遅れによる過剰生産・過剰在庫などで、経済成長の減速が避けられないとみられていた中国で、意外にもインターネットを活用したネット経済の動きが活発化しサービス消費のGDP（国内総生産）寄与度が上がり、経済を下支えしている、という。

要は、国有企業などの「旧経済」部門に代わってパソコンやスマートフォン（スマホ）を活用した消費財のネット通信販売が急増、さらにスマホを介在させたタクシー配車サービス、町の屋台での飲食代金のスマホ決済など、ネット活用の「新経済」が台頭し実体経済に活気を与えていた、というのだ。生産主導から消費主導の経済に変わったのだろうか。

アリババのネット通販で「独身の日」にわずか1日で1.9兆円もの売買取引はすごい

象徴的な事例はメディア報道でご存知と思うが、中国ネット通販大手アリババの話だ。2009年以来、毎年11月11日の「1」のつく日を「独身の日」と独自に名付け、ネット上で大々的に特別安売りセールを行っている。その売買取引額が昨年2016年に何と前年比32%増の1207億元、円換算で約1兆8900億円というケタ外れのものとなった。わずか1日でそれだけの消費購買力が若者などにあるところが、何とも驚きだ。

そんな矢先、NHKが最近、特集番組NHKスペシャルで「巨龍中国14億人の消費革命～爆発的拡大！ネット通販」と題して、ネット経済社会の問題を取り上げた。ネット通販による売買額が2015年に円換算60兆円にのぼり、今や米国を抜いて世界一になったという。現場ルポ中心の見ごたえある企画で、一攫千金を夢見る若者たちが起業して、ネット上で通販サイトを立ち上げ通販ビジネスに取り組む生態を描いた。成功してプロジェクト強化に乗り出す若者のケース、逆に思惑が外れて通販用の商品在庫を山のように抱えた若者夫婦は資金手当てがつかず廃業を余儀なくされるケースなど、さまざまだった。

GPSにリンクのサービスインフラ整備でネット通販のサービスに魅力、が決

め手

そこで、ジャーナリストの好奇心で、私なりに中国の現場にいる友人たちと E メールで情報収集し意見交換、また中国と往来を続ける日本国内の大学やシンクタンクの中国人の人たちにもネット経済の状況を取材した。今回は、それらの話をもとに、中国「新経済」の現状と課題を述べ、日本にとって学ぶものがあるとすれば何かをレポートしよう。

取材先の話をもとに、結論から先に申し上げよう。中国では日本のコンビニなど小売り店舗で経験するサービスのよさが全く見られない中で、中国の消費者が、急に便利になったネット通販に飛びつき、それをネット上の口コミで広げたため、爆発的に伸びたようだ。しかし注目すべき点は、それだけではなかった。

ネット経済化で新たな社会インフラ、とくに GPS（グローバル・ポジショニング・システム、衛星による地球測位システム）と組み合わせたサービスインフラが急速に出来上がったことが大きい。それによって注文後の商品輸送が今どの状況にあるか、到着はいつごろかが消費者に伝えられる。オンライン上での商品クレーム対応もシステム化された。日本でまだ縁遠いタクシー配車サービスが中国で伸びているのも、これらインフラ整備によるという。早い話、インターネットが中国経済社会システムを着実に変えつつあるのだ。

清華大・野村総研センター松野さん「びっくりするほど快適、中国は変わりつつある」

長年の友人の1人、清華大学・野村総研中国研究センター理事兼副センター長の松野豊さんはこう述べている。「中国のネット購買は本当に便利になった。タクシー配車サービス向けなどで開発された GPS とリンクしたサービスインフラが整い、その効果がプラスに働き、消費者満足度を高めている。私自身、外に出ると寒い北京で食事の出前代行サービスを頼むと、数分の誤差で正確に届く。しかも決済もスマホなどネット決済で OK。以前に比べればびっくりするぐらいの快適サービスだ。中国は間違いなく変わりつつある」と。

同じく友人の富士通総研主席研究員、金堅敏さんも「ネット時代における中国の消費拡大の可能性」と題する自身のレポートで「中国情報産業省や中国インターネット情報センターなどの統計では 2015 年のスマホのユーザー数が 9.1 億人、インターネットユーザーが 6.8 億人にのぼりネット大国と言ってもいいほど。IT インフラの整備やインターネット普及に伴い情報関連消費の市場規模が急速に拡大している」と指摘している。これらの数字は、日本に比べ数字の単位が 1 ケタ異なるが、中国では、巨大人口の強み部分を生かした消費パワーが、ネット経済化で弾みをつけつつあるのは間違いない。

日本はネット通販が急に伸びてきたが、宅配ビジネスは人手不足で対応しきれず

そんな中で、日本では逆に、ショッキングな現実が明らかになった。宅配ビジネス最大手のヤマトホールディングスが人手不足でサービス対応が追い付かず、人材確保のコスト増などで連結営業利益が一時的に減益になった、という。ネット通販が最近、日本でも急速に比重を高めたのは「グッド・ニュース」ながら、宅配ビジネスに配送が殺到、しかも時間指定などのサービス競争が加わり、現場は人手確保できりきり舞い、というのだ。

日本の場合、失業率が3.1%で労働需給ひっぱくに近いが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けての建設ニーズの高まりで人手不足が急速に強まった。それが3.11被災現場での慢性的な人手不足状況をもたらしているのみならず、宅配便現場や至るところにしわ寄せがきている。ネット通販の拡大などビジネスチャンスがあっても、人手の確保が伴わずチャンスを逃すのは異常だ。人口減少の危機にある日本で本気で女性活用や高齢者雇用はじめさまざまな抜本対策を講じなければ、大変なことになる。

通販輸送激化で違法サービスも、でも中国政府は出稼ぎ者の雇用創出から静観

本題に戻ろう。中国でのネット通販急増による配送サービス現場の人手確保問題はどうだろうか。金堅敏さんは、「日本と違って、中国は人手不足が深刻にはなっていない。量的な不足よりも、ネット通販にかかる人のサービスの質が問題になっている」という。

タイムリーに注文品が消費者の手元に届くネット通販は、配送システムもプラスに変えたのかと思ったが、松野さんによると「競争の激しさで、事業者は電気自転車に簡易な荷台をつけた配送車を使い、早く届けるスピードを競う。それが交通渋滞や環境トラブルを引き起こしている。これらの車は違法だし配送人の労務管理もずさんだと聞いている」という。ところがネット通販の配送が、農村からの出稼ぎ者の雇用創出に大きくつながっているため、中国政府も介入せず、当面は静観の姿勢だ、と松野さん言う。興味深い点だ。

中国NO2の李克強首相は、ネット通販を軸にしたインターネット社会の消費力を高く評価し、ネットベンチャーでの起業に関しても政府は政策支援していく、という。その点をNHKスペシャルが取り上げていた。しかし私の見るところ、「旧経済」部門の国有企业などの停滞で、かつて2ケタ成長だったGDPが今、6.7%にとどまる経済の現状を苦々しく見ている中国政府にとって「新経済」に強い期待を持たざるを得ないだろう。

「旧経済」の停滞にいら立つ中国政府、「新経済」への期待高まるばかり

中国政府が「新経済」担い手企業をどう見ているかで面白い話がある。米国タクシー配車サービスで先発ベンチャー企業のウーバーテクノロジーが、スマホなどモバイル活用によって営業免許のない「白タク」のドライバーなどをお客様と結び付け成功したビジネスに刺激を受け、中国でもベンチャー企業、滴滴出行が事業認可申請を行った際のことだ。

中国ウォッチャーの専門家の話によると、中国ではネットによるタクシー配車サービスは前例のない分野のため、関係する7つの行政機関が互いの権限をふりかざし規制の方向で動き出した。ところがタテ割り組織の弊害がもうろに出て決めきれない。そのうちにネット社会で利用者の期待先行からタクシー配車サービスへのニーズが高まったため、最終的に共産党中央が間に入り、規制よりも一転、容認で合法化に踏み切った、というのだ。

驚いたことに、滴滴出行はその後、ブームに乗って業績を急拡大し、中国に市場参入していた米ウーバーテクノロジーの中国事業を2016年8月に買収したのだ。これによって中国国内でのシェアが一気に90%のトップ企業になった、という。この場合、日本ならば、独占禁止法に抵触して、公正取引委員会が「待った」をかけるだろうが、そのM&Aは問題視されず現在に至っている。金の卵をうむ「新経済」への配慮？としか思えない。

資本主義的な市場経済と社会主義使い分けてきた中国も「旧経済」改革が力

ギ

中国政府はこれまで、資本主義的な市場経済化のシステムを容認しながら、社会主義中国の基軸を崩さず、という2つの体制の使い分けて巧みに経済成長を誘導してきた。しかしインターネットシステムが政府のコントロールがきかないほど走り出し、情報発信の面で、もし政治不安につながった場合、政治リスクになるため、歯止めをかける可能性が強い。現時点で中国政府は「新経済」期待が先行しているが、もう刃の剣と言つていい。

金堅敏さんによると、この「新経済」はネット通販などネット関連のものだけでなく、新技術、新ビジネスモデル、新組織などで構成されたものすべてを含むそうで、中国政府は新エネルギー自動車、バイオエネルギー、新農業組織、ロボット応用の製造業などにも力を注いでいる、という。その先端のアリババなどネットベンチャー企業の勢いはすごい。今では世界10大ネット企業にバイドゥ、アリババ、テンセントの中国3社が名を連ね、その頭文字をとつてBATと呼ばれ「新経済」の担い手企業となっているほどだ。

「新経済」は中国にとって成長下支えの期待の星となるかもしれないが、問題は、「旧経済」をどこまで改革できるかだ。事実、国有企業には既得権益にしがみつく共産党幹部が多く権力闘争もからんで先行きは不透明。中国ウォッチャーとしてはチェックが必要だ。

日本は中国ネット経済化によるライフスタイル変更・経済社会システム変革にヒント

さて、中国が情報通信の後発メリットを生かし、スマホなどモバイル端末を活用し、インターネットの自由活用だけでなく経済社会に組み込んでシステム化してしまったのは驚きだ。日本は学ぶべき点が多い。他人の迷惑も考えずスマホに見入って自分ごとに集中する若者らのライフスタイル変更が好ましいとは思えないが、たとえば病院の電子カルテ化、情報の共有化を進め、インターネット活用によって緊急事態に他病院、あるいは遠隔地診療所にもアクセス可能にすれば、スマホで患者の医療情報の共有が十分に可能になる。

それと、中国のネット通販が急速に普及したこと、日本企業にとっても越境EC、つまり国境を越えてインターネット上の電子商取引、通信販売を行うビジネスチャンスが増えた。日本企業が中国の巨大市場をターゲットに、ネット上で中国向けにショップ展開を行いマーケティングに工夫をこらせば高品質の日本商品への購買アクセスは高まる。中間所得層に広がりが出て、消費市場としての厚みが出た中国は間違いなく日本にとってチャンスだ。事実、福井県立大教授の唱新さんは「中国の巨大市場では質レベルの高いサービスへのニーズは高まっている。日本の宅配便を含めた物流サービスにかかる企業が、中国の巨大市場でビジネス展開のメリットは十分ある」という。以上、いかがだろうか。

第78回・新三木会（平成29年1月19日）講演会・参考資料

「天皇の世紀を生きる」

講師 保阪正康 ノンフィクション作家 昭和史研究家

略歴 昭和14年（1939）札幌市に生まれる。札幌東高等学校を卒業。同志社大学文学部社会学科卒業。卒業後、電通PRセンターへ入社。その後、朝日ソノラマで編集者生活を送る。1970年に三島由紀夫事件をきっかけに「死のう団事件」を2年間取材。途中で5年勤務した朝日ソノラマを退社してフリーに転じ、1972年に『死なう団事件』でノンフィクション作家デビュー。2004年、個人誌『昭和史講座』の刊行で第52回菊池寛賞受賞。

研究姿勢と主な著作

（1）昭和史をテーマとし優に100冊を超える。戦後日本は「歴史は科学である」とし、マルクス主義の演繹的な歴史観を培ってきた。しかし、講師は、組織・システム、或いは、人物について可能な限りの文献・資料や関係

者の証言を収集、史実を発掘・検証。帰納的に史実を積み重ね歴史とは事実の集積であり、史実を精緻に検証する中から教訓、或いは知恵を学ぶ、「記憶と記録、そして教訓へ」の姿勢。(『体験から歴史へ』)

(2) 本資料では、代表作『昭和陸軍の研究』、『東條英機と昭和天皇』、『昭和天皇』に加え30万部以上のベストセラー、『瀬島龍三』、『昭和史七つの謎』、『あの戦争は何だったのか』、併せて、『秩父宮と昭和天皇』、『吉田茂という逆説』、『後藤田正晴』をダイジェストして紹介する。

(3) 『太平洋戦争を読み直す』(2016・12 PHP文庫) 及び『昭和史のかたち』(2015・10 岩波新書)：本日販売

① 『昭和陸軍の研究 上・下』(1999・11 朝日新聞社)

膨大な関係文献・資料を消化し、延500名余に取材、高齢の関係者の証言を幾度も聴取(ex 石井秋穂・軍務課高級課員には15年200回近くレターをやり取り)、1990年より途中頓挫した期間も取材を続け10年余かけて完成させた著者渾身の850ページに及ぶ歴史的力作。下記の「東條英機論」共々昭和初期から太平洋戦争敗北に及ぶ昭和史、特に昭和陸軍の歴史的誤りに係わる貴重な実証研究である。昭和陸軍の組織・指導部の理念・思想、太平洋戦争は何を目的にいかなる形で戦われたのか、実像を描くことに努めた。特に消耗品とされた兵士(国民)と非人間的で無責任な軍官僚を意識した。構成は以下三部に分かれる。

第一部 「昭和陸軍前史—建軍からの歴史」：軍事主導で歪んだ国家が出来上がり中心に陸軍があった。明治憲法で天皇の大権とされた統治権、統帥権について、統治権は国務大臣がその大権を行使する、統帥権は参謀本部、軍令部長が輔弼(→主導)するという構図が法的に確立された。陸大で使われた『統帥参考』には「軍人こそが大日本帝国の主たる役目を果たす存在であり、その行動に他のどの集団の誰もが口を挟むことができない」と書かれている。日清・日露戦争を経て急激に軍備も整い軍事主導国家が形成されてきた。

第二部 「昭和陸軍興亡」：折々の具体的な動き44項目を探り上げ、昭和前期に戦争の実相を明確化。著者が発掘した従来、余り知られていない史実や気になった部分を紹介する。

1) **2・26事件**：皇道派(天皇親政で改革を唱える荒木貞夫、真崎甚三郎ら)の青年将校による国家改造を狙うクーデター未遂事件であるが、裁いた判士によると「軍内の派閥抗争でしかない」との結論。真崎に責任ありと。巷間流れていた「秩父宮黒幕説」は根も葉もないと明確にされた。

2) **中国国民党から見た「抗日戦争」**(指導者の一人「陳立夫」より聴取)：中日戦争はソ連が演出した。ソ連にとって日本と中国の戦争によって日本が国力を消耗し、自国への軍事的圧力が弱まることを歓迎、日本が中国に深入りするほど自国への脅威は減っていく。西安事件(張学良が蒋介石に抗日

民族統一戦線を迫って軟禁)でスターリンは毛沢東に蒋介石を救出させるよう働きかけ、第二次国共合作を実現させた。また、中国の学生を扇動、日本の少壮軍人に霸を唱えることを求めたという。

3) 日本軍はなぜ蛮行に走ったのか：陸軍は、士官学校出身者が牛耳るヒエラルキーとなっており、目立つことを重視、政治と軍事を混同し、妥協しない強硬論が一目おかれた。南京大虐殺から組織化、末期ほど異常集団化し、強姦、放火、略奪を軍のシステムとして行うようになっていたという。(しかし、関東大震災での流言飛語による朝鮮人や中国人の大虐殺、2・26事件でも斬殺や機関銃乱射に見る異常な残虐さはなぜなのか、疑問は残る)。

4) なぜ、軍部は独に傾斜していったのか：陸大卒の一割弱が留学するシステムの中で、明治初には仏の軍事システムを模範としたが、普仏戦争で独が勝利すると一気に独方式に変えた。明治21年～昭和11年まで50年間の留学生は、独(特に優秀で帰国後即参謀本部等の要職に)150人、仏80人、英55人、米40人。陸軍内部には独びいきが溢れていた。昭和初期、参謀本部にいた将校が「独に行くと自動的に独陸軍が女性をメイドの名目で同居させる。それで独に送られた軍人が独びいきになるというのは明治からずっと内緒話で伝わっていた」と証言。米英で同様のシステムを要求した軍人がいたが「恋愛をすればいいではないか」と釘を刺されたという事実も語り継がれているという。

5) 真珠湾への道は不可避だったのか：当時の指導者たちの拙劣さをこえて「歴史的意志」というべきものがあの戦争には流れていたと思える。すべての結論が折々の選択肢の最悪の選択を行ったという結果によって生み出されていた。この原因を辿るとあの日中戦争の侵略そのものに問題があり、それを引き摺ったまま軍事のみが政策決定の柱になった点にあると思う。真珠湾攻撃は日本が辿りつくべき未知だったというのが結論であると。

6) 参謀たちの体質とその欠陥について、本書では各項目に詳述されている。

(以下略・天地事務局)

同様に以下の書も紹介し逐条要約をのせている。ただし要約は省略します。

- ②『東條英機と天皇の時代』(上巻 1979・12 下巻 1980・1 文芸春秋)
- ③『昭和天皇』(2005・11 中央公論新社)
- ④『瀬島龍三』－参謀の昭和史 (1987・12 文芸春秋)
- ⑤『あの戦争は何だったのか』－大人のための歴史教科書－ (2005・7 新潮新書)
- ⑥『昭和史 七つの謎』 (2003・1 講談社文庫)
- ⑦『昭和史 七つの謎』パート2 (2005・2 講談社文)
- ⑧『秩父宮と昭和天皇』(平成元年4月・文藝春秋)
- ⑨『吉田茂という逆説』 (2008年8月・中央公論新社)
- ⑩『後藤田正晴』－異色官僚政治家の軌跡 (1993・10 文藝春秋)

世話を手分けして読み、要約を書いたものと思われますが、その労苦は大変なものだったと推測します。

連載作品

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 閣歩

18. ニュートン — 運動の第3法則

人が海上を舟で航行するとき、追い風を利用するため舟に帆を掛けはじめたのは、古代エジプトの時代にまで遡ることができるそうである。BC 2500 年サフル王朝ファラオの帆船のレリーフが残されているそうだ。中国から東南アジア、インド、アラブ諸国にも昔から似たような帆掛け船があったのであろう。船乗りたちはすぐに気がついたと思われるが、推進力がほかにないにもかかわらず不思議なことに、帆船は風に向かって進むことができるのである。

14世紀の中国明朝の宦官イスラム教徒の鄭和は、大船団を率いて東南アジア諸国、インド、アフリカ東岸にまで、明への朝貢を強要しながら 7回にわたり、風だけをたよりに大航海をつづけたという。

船乗りシンドバッドがどんな船に乗って航海していたか、リムスキー・コルサコフの『シェラザード』(第一楽章、海とシンドバッドの船)を聴きながら想像するほかはないが、シンドバッドは必要とあれば、向かい風が吹く海上を風に向かって自由に帆走を続けたにちがいない。

今回は、ニュートンの運動の第3法則について考え、そのひとつの応用(?)として、帆船が向かい風のなかを前進するという不思議を解明しようと思う。そのために先ず、現代社会の諸現象を説明するために日常会話でも度々使われるようになった「ベクトル」という概念をキッチリ定義しておこう。風には言うまでもなく風力があり風向きがある。このように、大きさ(パワー)と向きをもつものをベクトルというが、風をベクトルとして数学的に扱えばいろいろなことが見えてくるのだ。以下にはベクトルの典型例として、二次元座標平面上の線分(大きさ=長さ、向きがある)をベクトルとして考えてみよう。なお、ここに得られた法則や規則を3次元空間に拡張することは容易である。「運動量」「力」「速度」「加速度」などは3次元ベクトルである。一方「温度」「速さ(速度ではない)」「質量」「エネルギー」などは大きさはあるが向きを持たない。このような量をベクトルに対してスカラーという。

平面上にある次の図形を見ていただこう(fig. 1)。線分 \overrightarrow{OA} に O から A に向きをつけて \overrightarrow{OA} と書き、これをベクトルという。ここで O を始点、 A を終点という。ベクトルは大きさと向きをもつものである。ベクトル \overrightarrow{OA} の大きさは線分 \overrightarrow{OA} の長さで $|\overrightarrow{OA}|$ と書く。ベクトル \overrightarrow{OA} の始点や終点はどこ

にあっても同じものとみなす。fig. 1においては

$$\overrightarrow{OA} = \overrightarrow{CB}$$

$$\overrightarrow{OC} = \overrightarrow{AB}$$

四辺形 $OABC$ は平行四辺形である。ベクトル \overrightarrow{OA} の x 軸, y 軸への射影をそれぞれ x 成分、y 成分といい、 $\overrightarrow{OA} = (x, y) = (5, 2)$ と書くこともある。

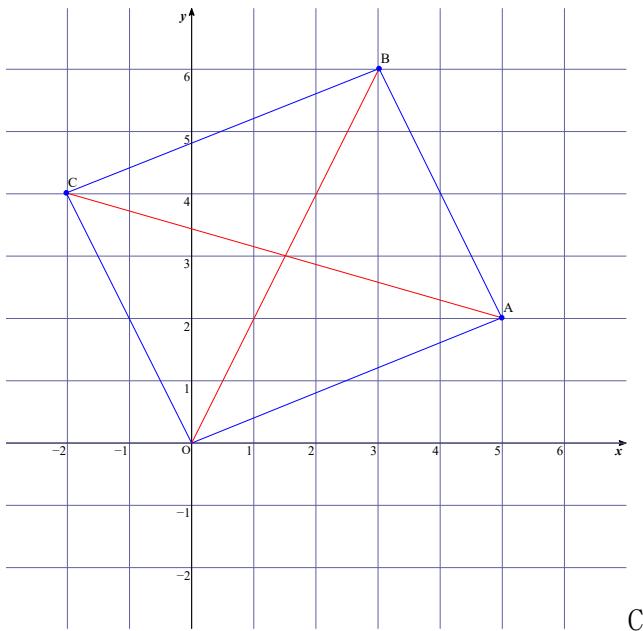


Fig. 1

ベクトル \overrightarrow{BA} をベクトル \overrightarrow{AB} の逆ベクトルといい、 $\overrightarrow{BA} = -\overrightarrow{AB}$ とする。

始点と終点がおなじ位置にある（ひとつの）ベクトル、たとえば \overrightarrow{AA} をゼロベクトル（長さも向きももたない）といい、 $\vec{0}$ と書く。 $\overrightarrow{BA} + \overrightarrow{AB} = \vec{0}$ 。次にベクトル同士の演算を定義しよう。まず、ベクトルの和については

$$\overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OB}$$

とする。同じく $\overrightarrow{OC} + \overrightarrow{CB} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{OC} = \overrightarrow{OB}$ が成り立つ。これらは、ベクトルの合成則であるが、逆に、 \overrightarrow{OB} を \overrightarrow{OC} と \overrightarrow{CB} などに分解しているのだから、ベクトルの分解法則とも考えられる。差については

$$\overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA} = \overrightarrow{AB}$$

同じく $\overrightarrow{OA} - \overrightarrow{OC} = \overrightarrow{CA}$ などとなる。

ベクトルをスカラー一倍すれば、ベクトルの大きさがスカラー一倍になり、ス

カラーがマイナスのときベクトルの向きが逆になる。なお、 $\overrightarrow{OA} = (5, 2)$ と書く場合、x 軸上プラスの向きの単位ベクトル（大きさ = 1）を \vec{i} とし、y 軸上プラスの向きの単位ベクトルを \vec{j} として $\overrightarrow{OA} = 5\vec{i} + 2\vec{j}$ と分解して書けることを念頭においていて、これら単位ベクトルの係数を成分といい、それらはスカラーとして扱うのである。

ベクトルについて当面これ以上の知識は必要としない。運動量、力などは 3 次元ベクトルとみなすことができるので、それらをそれぞれ \vec{p} , \vec{F} と書けば

(ニュートンの) 運動の第二法則は

$$\frac{d\vec{p}}{dt} = \vec{F} \quad (*)$$

と書ける。各ベクトルを座標成分に分解して書けば $\vec{p} = (p_x, p_y, p_z)$, $\vec{F} = (F_x, F_y, F_z)$ となり、この各成分について第 2 法則を書けば

$$\frac{dp_x}{dt} = F_x, \quad \frac{dp_y}{dt} = F_y, \quad \frac{dp_z}{dt} = F_z \quad (***)$$

などとなり、ベクトルによって書かれた式 (*) は 3 つのスカラー成分に分解した式 (***) を一括して表したものにほかならない。

ニュートンは『プリンキピア』において、運動の第 3 法則を Law III として次のように述べる。

運動の第 3 法則：すべての作用（= 力）に対して、大きさが等しく反対向きの反作用が存在する。すなわち、2 つの物体の間で互いに働きあう相互作用は常に大きさが等しく、反対方向を向く（和田純夫訳）。

(To every action there is always opposed an equal reaction: or the mutual actions of two bodies upon each other are always equal, and directed to contrary parts.)

宇宙空間のなかに 2 つの物体 a と b だけが漂っているとする。これらがたまたまぶつかった。衝突時の運動量はそれぞれ \vec{p} , \vec{q} であったとする。

このとき、物体 a は物体 b から力 \vec{F} を受ける。一方、物体 b も物体 a

から同じ大きさの衝撃（反作用）を受け、その方向は \vec{F} とは逆向きになる、と第 3 法則は主張するのである。数式を用いて書けば

$$\frac{d\vec{p}}{dt} = \vec{F}, \quad \frac{d\vec{q}}{dt} = -\vec{F}$$

これらを辺々加え合わせば

$$\frac{d\vec{p}}{dt} + \frac{d\vec{q}}{dt} = \frac{d(\overrightarrow{p+q})}{dt} = \vec{0}$$

となり、微分してゼロになるものは、定数でしかありえないから

$$\vec{p} + \vec{q} = \text{定数}$$

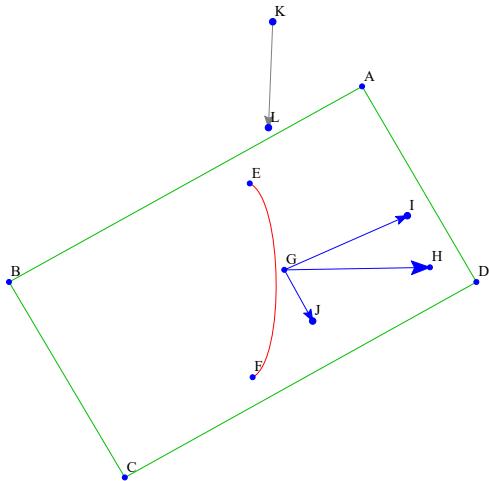
であることがわかった。つまり、外からの力を受けていない2体系の全運動量は保存される。同じく、多くの物体の集団も物体のペアごとに作用と反作用は打ち消しあう(作用反作用の法則)から、外力をうけていなければ集団の全運動量は保存される。

作用と反作用が万有引力の場合、ニュートンは若干まわりくどいが次のように説明する。ひとつの物体が a, b, c 3つに割れてこの順序にくっついているとする。a は c から引力 \vec{F} を受けてその力が b にそのまま加わる。

一方 c は a からの引力 $-\vec{F}$ をうけてその力が b にくわわる。もし b がうけるこの2つの力が打ち消しあわないならば、3つにわたった物体は動き出すであろう。現実にはそんなことは起こらない、ゆえに第3法則は成り立つ。以上で準備はととのった。ヨットの話題にもどろう。

ヨットの世界大会に出場する競技用ヨットの美しさにはほれぼれする。メインセール(一番おおきな帆)は硬質の材料を用いて作られており、ジェット航空機の翼の片方を海に立てたようなもので造形的にたいへん美しい。事実、メインセールは帆というより、翼の役割を果たすのだ。スピードは平均時速 50–60 km、中には時速 100 km を超すものもあり、4本脚だけで 15 人ほどのクルーを含めて 2 トンもあるヨットを支えて、まさに海上を飛ぶ(フォイリング)のだ。4本足の下、海中には航空機の尾翼のようなものが水平に取り付けられていて、その揚力によってヨットは空中に浮かぶ。安定を保つために皆、双胴にしてその間隔 7m の間の網の上をクルーが忙しく行きかう。まるで戦場である。それでもメインセールが 5 階建てのビルほどの高さがあるため、横倒しになることは日常茶飯事なのだ。

次の図は、競技用ヨットの図である。長方形 ABCD がヨット本体で赤い曲線がメインセールである。風は K から L の方向にふいている。この時、メインセールから揚力 \overrightarrow{GH} が発生する。この原理は航空機の翼の揚力と全く同じである。このベクトルは \overrightarrow{GI} と \overrightarrow{GJ} の和として表現できる。 \overrightarrow{GI} はヨットの推進力になるが、 \overrightarrow{GJ} はヨットを横滑りさせる力になる。ところが、ヨットには海中に平べったい4本足が出ていて、これらの足が海水からの反作用 $-\overrightarrow{GJ}$ を受けとめて、横滑りベクトルを(第3法則のはたらきで)打ち消してくれるのだ。この足をキールというが、薄い板になっていて、進行方向への抵抗はほとんどない。



こうして推進力だけが生き残り、ヨットはジグザグのコースをたどりながら、風上に向かってすすむのである。なお、ヨットは1艘、1艇、1隻などとかぞえてもいいが競技用ヨットは1杯、2杯とかぞえるらしい。ちなみに筏は1鼻（ひとはな）フタハナと数えるらしい（知らなかつたなあ！）。

<そうだ京へ行こう・古刹の花物語> (16)

大竹 漢州

若狭街道の古刹

大原の里5・寂光院

寂光院は若狭街道を挟んで、三千院の西方草生の里にあります。かつては藁葺き屋根を頂いた鄙びた民家が、肩を寄せ合うように建ち並んだ田舎道を歩いて行きました。今では過去の記憶の中を辿るしかありません。癒しの里と大原が呼ばれて久しくなりましたが、若い娘さんを相手にした派手な看板を掲げたショップ増えたことも残念です。

大原の里は学生の頃から通いました。当時は本当の里村でした。寂光院は平家物語で語られた時代に生きたままの古刹の風格を持っていました。旅人にとって寂光院に強い記憶が残っています。東芝大阪工場出張の後、悦子と京都で待ち合わせ、雪の降る大原の里を訪れた事があります。東芝退職直前の冬二月の事です。雪の積もった石段を登りました。全ての音は雪に吸い込まれ、降る雪がコートにあたる音と踏み締める雪の音しか聞こえません。雪で灌がれた静かな寂光院でした。旅人にとって慶長年間に再興された本堂の御影を目にした最後の姿でした。何故か？急に寂光院を訪れたくなりました。理由は分かりません。大雪の予報が出された日です。虫が知らせたのでしょうか？2000年5月9日に深夜に放火で本堂ご本尊とも焼失損焼してしまいました。

『平家物語』の冒頭の一節に

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり。
沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理を あらわす
おごれる者久からず 唯春の夢の如し

京都には平家物語に関わり深い土地が多く残っています。嵯峨野の「祇王寺」「滝口寺」そして大原の里「寂光院」です。ものの哀れを感じるのは、雪の中に佇む寂光院であり、焼け落ちた寂光院の「無常」な姿でした。

寂光院の寺歴は古く、聖徳太子の時代まで遡る寺院であると書かれています。聖徳太子の父、用明天皇の菩提を弔うために建てられたとされ、太子の乳母玉照姫（恵信尼）が開祖と言われる説、空海開基の説、11世紀に大原の里に隠遁して、大原声明を完成させた「融通念佛」の祖、良忍上人開基の説等々諸説ありますが、あまり詮索しない方が大原の里の古寺には相応しい気がします。何れにしても『平家物語』の舞台で在ったことは事実です。

焼失後に寂光院を訪れるのは初めてです。長い石段を登ります。雪の日が昨日のように思い出されます。今は秋、季節の色に染まり、ゆく秋を惜しむように鮮やかに樹々が輝き、階段を覆い尽くしています。石段の上の開けた大地に尼寺・寂光院の新しい本堂が姿を見せました。清々しく尼に成り立ての女人の姿です。かつての建礼門院徳子も斯の如きお姿ではなかったでしょうか。平安末期に壇ノ浦の戦い（1185年）で平家一門滅亡した後、建礼門院は大原の里で髪を下ろして仏門に入って、入水した安徳天皇及び戦いで命を落とした平家一門の公達の菩提を弔う念佛三昧で、後世を過ごしたと言われています。幼い愛子を喪い地獄を見た建礼門院が、救い求めた御本尊の姿は、地蔵菩薩立像とご本尊の周囲に従う6万体の小さな地蔵菩薩立像でした。

余談です。地蔵菩薩は釈迦牟尼の入滅後に、弥勒菩薩がこの世に現れる56億7千万年の間、仏のいないこの世に住んで、六道（六道とは六の迷界、地獄 餓鬼 畜生 修羅 人間 天の間を生まれ変わり、死に変わりして迷いの生を生き続けこと）の衆生（多くの人々）を教化・救済すると言う菩薩（悟りを求めて修行する人）です。成道以前の釈迦牟尼も菩薩でした。地蔵菩薩の一般のかたちは、比丘形で左手に宝珠、右手に錫杖を持っています。仏教用語を用いて、少し余談が長くなってしまいましたが、何故に建礼門院が地蔵菩薩に縋った心境が分かります。

本堂の中央に真新しく美しい御顔と地蔵菩薩が、そして堂宇壁部には小さな立像が安置され、悩める人々に救済の手を差し伸べています。栄華の頂点を極めた建礼門院は、一瞬の内に地獄に落ちた罪を悔いて、平家一門の冥福、一切衆生の正成覚を祈って、侘しい余生をご本尊地蔵菩薩と共に過ごしました。

余談です。地蔵菩薩が手にしている「宝珠」は仏教用語で摩尼と言われ、珠・宝（如意と訳す）・宝石で、美しいものから転じて、“濁水を清らかにする不思議な働きをすること”を指し、「錫杖」は頭部の輪形に6個から12個の遊環を通した部分から発する音で、修行で山野で暮らす修行者を禽獸や毒蛇から身を守ることから転じて“煩惱去して智慧を得ること”を指します。

本堂の前に立つと、右手に苔生した石で縁取られた心字池の畔に、一本の古樹が、あの火事で罹災して、太い幹と途中で切り落とされた二本の枝が、天に向けて助けを求める様な姿で残っていました。樹齢 1000 年を超えた「姫小松」の枯木です。諸行無常の世界観にあります。大原の地名を広めたのは、後白河法皇が建礼門院を訪ねた『平家物語』灌頂巻「大原御幸」の印象的な一段にあります。

西の山の麓に一字の御堂あり。すなわち寂光院これなり。ふるう造りなせる泉水木立、よしある様な所なり。甍破れて霧不斷の香りをたき、扉落ちて月常住の燈をかかぐとは、かような所や申すべき。

庭の若草茂り合い、青柳絲を乱りつつ、池の浮草波に漂い、錦を晒すかとあやまたる。中島の松にかかる藤波の、裏紫に咲ける色、青葉まじりと遅桜、はつ花よりも珍しく、岸の山吹咲き乱れ、八重立つ雲の絶えまより、山時鳥の一声も、君の御幸を待ち顔なり。(注・中島の松が「16姫小松」)

少し長くなりましたが、850 年前の寂光院の本堂前の庭園の様子が目に見えてくる様です。心字池や周辺を飾る草花・樹木が美しく表現されています。今まで年月を重ねた姫小松も、寂光院に隠棲した真如覚比丘尼(建礼門院)、証道比丘尼(女官阿波内侍)が、仏と自然と共に生きていた姿を常に目にしていたことでしょう。

ややあって上の山より、濃き黒染め衣著
たりける尼二人、岩のがけぢを伝えつつ 下り頂ひたるさまなりけり

これが数奇な人建礼門院と阿波内侍の世を棄てた姿でした。建礼門院を寂光院で待っていた後白河法皇に向かって、徳子は「六道のすべてをこの目でみてまいりました」と語り、勝者であったはずの法皇の圧倒した一言でした。二人が身につけて山に芝刈りに行く姿を真似たのが大原の衣装であるとの伝承が残っています。

本堂の右手前の「姫小松」のある心字池が「汀の池」。その先に「諸行無常の鐘」があり、小径を超えると下草刈りされた空地が現れます。この池が建礼門院が庵を結んだ跡です。

本堂前に続く階段に立つと、清々しい水音が左手の庭から聞こえてきました。背後の山から引いた水が、三段の滝と成って流れ落ちて、それぞれの滝が異なった音色を発して響き、一時の心の安らぎを与えてくれました。「四方正面の池」です。ものの哀れを感じる庭でした。この庭の上手の「大原西陵」に建礼門院徳子は永遠の眠りについています。大原・草生の里は不思議な処です。藤原から源平頃の時代色が何処とも無く漂っている様です。

紅葉が敷き詰められた階段を下っていくと、バスを降りた観光客の団体の姿が見えて、静寂な気分が破られてしまいました。

般若心経読本（2）

藤田 克明

[仏設摩訶（ぶっせつまか）]

般若波羅蜜多心經（はんにやはらみつたしんぎょう） 唐三藏法師玄奘 訳

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

（觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したもう）

【訳】觀自在菩薩は、深遠なる悟りを得る修行のなかで、人間や世を構成するといわれる五つの要素（五蘊）には実体が ない空ということをみきわめた（悟った）。これによりいっさいの苦しみや災難をすべて克服することができた。

【解説】

一、

『般若心經』は、漢詩でいう起承転結という手法を探っています。この段が「起」（詩・歌の起こし）に相当する部分であり『般若心經』でいいたい結論は、ここに尽きているといつても過言ではありません。それは『般若心經』はもとより『般若經』全体の核心となる教えである「空」が説かれているからです。空とは悟りや涅槃を含む世の中の全てに対し、無執着が最高の徳であると悟ることができれば、人生の「苦」は克服できるという思想です。

これが『般若心經』の人間観、世界観です。なお、サンスクリット語の原本には「度一切苦厄」（一切の苦しみや厄（わざわい）を超えた）の文字は無かったようです。インド人であればこの五文字が無くとも哲学的な認識として受け入れられたのかも知れませんが、仏教に実際的な利益を求める中国人は満足しなかったのでしょう。そこで『般若心經』を漢訳した鳩摩羅什が五文字を追加したといわれています。この段では釈迦仏教の教理である「五蘊（うん）」を否定していますが、釈迦仏教を否定しなければ大乗仏教への道は開けない。つまり大乗仏教が（当時は）新興運動であり、人々に受け入れられるためには、より魅力的な新機軸を打ち出す必要があったのでしょう。

釈迦仏教は基本的には財産を処分するなど俗世を捨てて出家し、一切の生産活動を禁じられ、悟りを目指してひたすら精進しなければなりませんが、大乗仏教では在家のままでも悟りに近づくことは出来る。そして人としての善行を重ねていけば、仏道修行のような特別なことをしなくても良いとしました。また、釈迦仏教では修行者がいくら頑張っても釈迦になれないのは誓いをたてるべき釈迦に会えないとするからで、次に仏陀（悟りを得た者）に会えるのは五六億七千万年後に弥勒菩薩が現れるときとしています。地球の寿命が尽きるのと同じ時期だそうです。

一方大乗仏教では、この世は一つではなく並行する世界（パラレルワールド）が無数にあって、そのそれぞれに釈迦（ブッダ）がいると想定しました。釈迦の数が一举に増え、死なない釈迦も登場しました。これなら釈迦に会える確率は大幅に増え、その結果仏像も釈迦如来以外に、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来などが新たに誕生しました。

因みに浄土信仰系統では極楽浄土という別世界を設定し、そこに阿弥陀

如来という釈迦がいつでも居るということにしたのです。そうすれば極楽に往生すれば必ず釈迦に会え、誓いを立てて自分が釈迦になる道を歩み始めることが出来ることになりました。

また般若経系統では、浄土信仰系統とは別の道を説いています。それは『般若経』を読んで「何か感じ入るところ」があれば、過去の世で釈迦に会ったことがあるとしています。本人がそれを自覚していなくても、単に忘れているに過ぎないとしており『般若経』というお経にどれだけ深く感動するかが、釈迦になれるかなれないのかの分かれ道になると説いています。大乗仏教が釈迦仏教に比べて、易行化（いぎょうか）かされているのではないかといわれる説は、この辺にもあるようです。

なお『般若心経』には、觀世音菩薩（大乗仏教を代表する菩薩）と舍利子（しゃりし）（実在した釈迦の十大弟子の一人で 智慧第一の人）の二人が登場しますが、菩薩が舍利子に教えを説くという構図になっているのをみても、大乗仏教の方が上だと言いたい思いが読みとれます。

二、

それでは字句に沿って見てみましょう。「觀自在菩薩」とは觀世音菩薩のことと、慈悲救済を專業とする菩薩の名前です。觀音とも觀世音ともいいます。千手觀音に千本もの手があるのは、それだけ多くの衆生（一般大衆）を救うことを自身が強く求めている証（あかし）です。菩薩はすべての人の、あらゆる種類の悩みが救われるまで決して仏とはなりません。大悲不 成仏（だいひふじょうぶつ）なのです。その觀音が般若（智慧）を深く行（ぎょう）ずると説かれていることに注目したいと思います。

「深（じん）」は知るだけでなく慈悲と結びついて実行に移せる深い仏の智慧で、「どんなときでも、どんな悩みでも救う力（妙智力・みょうぢりき）」を得るために自ら深い瞑想にはいり、そのなかで悟りの内容を把握していったといっています。その不思議な力のことを『般若心経』では「般若波羅蜜多」（智慧の完成）と表現しています。なお『般若経』に登場する觀音は、すべて造られたキャラクターで大乗仏教特有の理想の救済者です。觀音菩薩は瞑想のなかで五蘊（ごうん・注8）は実はまったくの錯覚で実体をもたないもの、「空」であると悟ったのです。それが「照見五蘊皆空」です。

五蘊（ごうん）とは我々人間を含めてこの世界は、すべて五つの要素から成り立っているとするもので、逆にいえば五蘊はすべての存在を構成する要素といえ釈迦の説いた教理です。その構成 要素は、色（しき）・受（じゅ）・想（そう）・行（ぎょう）・識（しき）の五つの蘊（集まり）とされます。

人間の場合でいいますと「色」は肉体、身体を表し、「受～識」はその人の心的作用をいっています。物心の総称と受け取ってください。「受」は苦・樂・不苦不樂（の三種）等、外界からの刺激を感じとる感受の働き、「想」はいろいろな考えをあれやこれやと組み立てたり、壊したりする構想の働き、「行」は能動的に何らかを行おうと考える意志の働き、そして「識」は認識あるいは判断のことです。

人間という存在は、この五つの根本的機能（五蘊）同士が、ある特定の法則にしたがって作用しあい関係しあうことによって存在していると釈迦は考えました。ところが大乗仏教では、人間は生きているときは五蘊を使って活動しているが死後五蘊は残らない。だから人間も結局は空=非永久的な存

在であるとしています。これが大乗仏教のいう「空」の理論です。

三、

「一切苦厄」の「苦」という言葉がでてきました。実はこの「苦」という概念こそが釈迦仏教の出発点、原点なのです。釈迦は、あるとき「人生の充足は、地位や名譽、財産などでは得られない」ということに気づき、生きることが苦しくてたまらなくなりました。そこで、その苦しみを克服せんと王宮も家族も捨て二九歳で出家してしまいました。そして何故人間は苦しむのだろうか、その苦しみから脱却するにはどうしたらよいかを六年の間 考えに考え続け、同時に森のなかで苦行をし続けたといわれています。

釈迦の苦しみ苦悩とは、このように日常の些末事などではなく人は何のために生きるのか、いずれ老い死ぬ身であるという絶望感等々、人生の本質は苦しみ以外の何ものでもないのではないかという苦悩のことです。そして三五歳のときに、遂に「悟った」とされます。

それは「私の苦しみなど誰も助けてはくれない。自分を変えることが唯一の救われる道だ」ということが解った（悟った）のです。釈迦は「ブッダ・buddha」（目覚めた人）になったのです。変えるとは自分の心の在り方、ものの見方、つまり考え方を変えるということです。人が老い、衰え、死ぬなどは世の法則、自然の摂理であって誰も変えられないと考えました。ここに釈迦の本義（根本的価値）があります。

その後時が流れ、釈迦が八〇歳で入滅する直前に弟子のアーナンダに残した言葉があります。それは「自分自身を島（灯明）とし、自分自身をよりどころとして暮らせ。と同時に法（ブッダの教え）を島とし、法を救いのよりどころとして暮らせ。ほかのものを救いのよりどころとしてはならない」（パーリ語『大パリニッバーナ』より）というもので、信すべきは自分自身と法の二つであり、自己鍛錬せよと言い残したとされます。釈迦の「悟り」とは「苦」を徹底的に観察、分析した結果その真の原因と苦を消滅させる対処法を編み出し、修行の結果涅槃に入れたというものです。

涅槃とは、自分で自分の心を完全にコントロールできた状態をいうとされます。釈迦は千差万別の苦を

①肉体的生理的な苦と ②精神的心理的な苦に分け、①、②ともそれぞれ四つずつの苦があるとしました。前者の四苦は「生苦（じょうく）、老苦、病苦、死苦」、後者の苦は「愛、別離、苦、怨憎、会苦（えく）、求不得苦（ぐふとくく）、五蘊（陰・おん）盛苦（じょうく）」の四苦に整理しています。合わせて四苦八苦といいます。この釈迦が説く「苦」とは「思うようにならない、願いどおりにはならない、避けられない困難」という意味です。①の四苦は字句の通りですが、②の愛別離苦は愛するものと世別、死別する苦しみをいい、怨憎会苦は嫌な人と顔を合わせなければならぬ苦しみであり、求不得苦は不老や不死、欲しいもの、地位が得られない苦しみをいいます。そして五蘊（陰）盛苦は以上の苦の根源となる心身を構成している諸力=五蘊が盛んに働く結果、苦しみが生じるということです。

この四苦八苦の最初の「生苦」（生きることの苦しみ）と、最後の「五蘊（陰）盛苦」は、特定の苦をさしておらず「生苦」は生まれたから苦しみが始まるということで「老・病・死」の総称であり、「五蘊（陰）盛苦」は同様に「愛別離苦 怨憎会苦 求不得苦」の総称です。したがって「四苦八苦」の実質内

容は「三苦・六苦」となります。

釈迦の「苦」に対する分析結果は以上の通りですが、「苦」が生じる原因及びその生じるプロセス、そして最も大事な「苦」の滅却法についての釈迦の教えは三四頁の四、に記しました。

四、

『般若心経』は、釈迦が苦労して見つけ出した「五蘊」はみんな錯覚であるとしています。このように悟ったからこそ、この世の一切の苦しみや憂いから解放された。それが「度一切苦厄（どいっさいくやく）」です。つまり物も心もない（空）ところに、何の悩みや葛藤が起こるのでしょうか、いや起きるはずがないと自問自答しているのです。これが 皆空という基本的な認識です。『般若心経』はこのように釈迦の教えを否定する經典です。

以下、続々出てきますが大乗佛教は釈迦佛教の教えを悉く「錯覚である」「仮の姿である」、したがって「実体はない」と否定しており、釈迦の教えを超えると高次たらんとする意図が読みとれます。

その言わんとしているところは次のような考えです。我々は物や人の心に執着し、名譽や地位、財産に執着し、得られた場合にはそれらを放すまいとして更に思い悩みます。しかし、その執着せんとする「もとのもの」が一切ない（空）と信じれば、必然的に苦しみから 解き放たれることになる。苦しいと思う心を、このように「考え方」を変えて空（無執着）と観ることができれば苦は必然的に消滅する。これが大乗佛教の説く教理です。「度」は救うということで、觀音さまが五蘊皆空 という真実を発見して人間のすべての苦を救ってくれたと説いています。

[注] 五蘊・ごうん（一人の人間で考えた場合、個人の存在全体を表していると考える）。蘊は集まりのこと。

肉体

①色（しき）……われわれをなしているものの外側の要素すべて（目にしている物質的な存在）

心的作用

- ②受（じゅ）…外界からの刺激を感じとる感受の働き（それを刺激する）
- ③想（そう）…ものごとを様々に組み立てて考える構想作用（心の中のイメージを膨らませる）
- ④行（ぎょう）…何かをしたいと考える意思の働きや、その心的作用（行動や知識が生まれる）
- ⑤識（しき）…心のあらゆる作用のベースとなる認識する働き（行動や知識が生まれる）

五蘊が人間個人のみならず世界全体を意味するようになると「色」は外界を含む物質一般を、心的作用は力 や概念を包含されるようになった。

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 平成29年2月16日（木曜日）

午後 5 時半～6 時半：第一講

講演：「運慶のまなざし－宗教彫刻の靈性と造形」

講師：興福寺国宝館長 金子啓明

午後 6 時 40 分～7 時 ・・・ 心を静める

午後 7 時～8 時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学) 文化学園 文化服装学院内

受講料：500 円 先着 200 名

(JR 新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から 8 分、都営新宿線
新宿駅 3 分)

第 79 回 新三木会講演会のご案内

1. 日時・会場 2017 年月 2 月 16 日(木) 13:00—15:00

如水会館スターホール

2. 演題・講師 『トランプ大統領で変わるアメリカ、世界、そして日本は』

古森義久氏 國際問題評論家

産経新聞ワシントン駐在客員特派員

3. 申込・会費 E/Mail：shinsanmokukai@gmail.com

TEL：047-464-4063

フルネーム・卒年・所属 (例:一般・紹介者名)

会費:2000 円 婦人 1000 円 学生無料

茶話会:15:15-14:20 千円 (自由参加)

4. ホーム <http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

● 第 80 回 3 月 16 日(木) 13 時より

『昭和史の岐路に関する争点について(仮題)』

秦 郁彦氏 現代史研究家、元千葉大学、日本大学教授

● 第 81 回 4 月 20 日(木) 13 時より

『今後の日露関係(仮題)』

コンスタンチン・サルキソフ氏

山梨学院大学名誉教授、法政大学講師

ロシア科学アカデミー東洋研究所〈ロシア〉特別顧問・所長

事務局

<事務所までの道のり>

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号

(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

- ① JR御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、
- ② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと（都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると）、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。（1階は焼肉屋「もとやま」。）そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくださいと送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいているのでご了承ください。

<振込先> 振込先：三井住友銀行「神田支店」（普通）7871532
(口座名) テンチニアネットワーク
<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・441号

発行：2017年1月31日

:天地シニアネットワーク事務局（津田 孜人）

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室

TEL・FAX 03-3837-0290

E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp